

# 人口減少や高齢社会で衰退する地方 関係を積み重ね問い続ける姿勢が重要

人口減少が進む中、北海道の小さな町が静かな輝きを放っている。補助金頼みの施策や大規模開発も無いが、地方創生の事例として注目を浴びている。

## 写真文化を街づくりの軸として育てた北海道のある町

日本の地方創生は、長年に亘って重要な政策として掲げられてきた。しかし現実には、人口減少や高齢化、若者の都市流出に歯止めがかからず、多くの地域が先行き不安を抱えている。補助金を使った事業は数多く行われてきたが、事業が終われば人もお金も去ってしまう。こうした状況を見ると、私達は地方創生のやり方そのものを見直す時期に来ているのではないだろうか。

大きな問題は、「人を増やすこと」だけを目標にしてきた点にある。少子化が進む日本で、すべての地域が人口増加を実現することは不可能だ。それにもかか

わらず、多くの自治体が似たような観光施策や移住促進策に取り組み、結果として地域同士が競い合う消耗戦になっている。また、外部任せの事業が多く、利益や人材が地域に残らないという構造も変わっていない。これでは地域の自立は難しい。こうした中で、注目されるのが北海道上川郡東川町の取り組みである。

旭川市に隣接し、人口約八五〇〇人の小さな町だが、三〇年で人口を約一・二倍に増やし、全国でも珍しい人口増加の地方自治体となった。その背景にあるのが、「写真の町」という一貫したテーマである。一九八五年に「写真の町宣言」を行い、以後四十年近く、写真文化を町づくりの軸として育ててきた。観光資源が温泉に偏り、衰退の危機にあった町が、

写真という文化を選び、町ぐるみで挑戦する決断をしたことは、当時としても大胆だった。

注目すべきは、その取り組みが一過性のイベントで終わらなかった点だ。国際写真フェスティバルや写真甲子園は毎年継続され、町民や来訪者、若者が交わる場として定着している。特に写真甲子園は全国から高校生を呼び込み、町の日常そのものを舞台にすることで、人と人との自然な交流を生み出した。写真を撮る側と撮られる側という関係を超え、町民が関わる存在になったことが、町の空気を大きく変えた。

さらに重要なのは、こうした文化的取り組みが「関係人口」や「移住」へとつながっている点である。大会参加者やボ

※ 1 関係人口：その地域に親族が住んでいる人・仕事で訪れている人・短期滞在している人など、なんらかの理由で継続的または複数回訪れたことがある人を総括して「地域との関わりがある関係が強い人＝関係人口」



大雪旭岳の原水。「写真の町」東川町は水資源も豊富である。

ランティアとして訪れた若者が、何度も町を訪れ、やがて住む人が出て来る。行政が無理に移住を促すのではなく、町そのものが人を引き寄せる土壌を育ててきた結果だろう。

東川町のもう一つの特徴は、「写真の町」にすべてを押し込めていないことだ。豊かな自然、良質な水、ブランド米、家具産業、日本語学校による外国人受け入れなど、多様な魅力が重なり合っている。だが、それらを無理に並列させるのでは

なく、「写真」という強い芯で束ねている点が、この町の巧みさである。

ここで学ぶべきは、地方創生において「何をやるか」以上に、「何を軸にするか」が重要だということだ。多くの自治体は、特産品づくり、イベント、移住支援を同時に進め、結果としてどれも中途半端になりがちだ。一方、東川町は、四十年近く同じテーマを掲げ続け、条例まで制定して後戻りできない覚悟を示した。その積み重ねが、今の評価につながっている。

ただし、東川町の取り組みは、単純に他地域が真似できるものではない。「写真」を別の分野に置き換えればうまくいく、という話ではないからだ。重要なのは、地域が本気で信じ、長く育てられるテーマを持てるかどうかである。そして、それを行政だけでなく、町民自身が楽しみ、誇りを持てるかどうかだ。

東川町は「積極的な人口増加策は取らない」と公言し、「<sup>※2</sup>適疎<sup>そ</sup>」という考え方を掲げている。これは、数を追わず、暮らしの質と関係性を大切にする姿勢の表れだろう。人口増を成果指標にしがちな国の地方創生政策とは、一線を画す考え方でもある。

## 共に創造し、共に助け合い、共に栄える

地方創生にこれと言った答えはない。しかし、東川町の歩みが示しているのは、地方創生とは施策の寄せ集めではなく、文化を軸に人を育て、時間をかけて関係を積み重ねることが、共に栄えて行く道になり得たことを示している。行政だけが主導するのでも、外部人材に頼り切るのでもない。住民、移住者、関係人口が対等に関わり、共に創造し、助け合って歩んで行く関係を築くことが、持続可能な地域の土台となる。筆者もこれまで何度か東川町を訪れているが、そのたびに感じることは、町全体に無理のない一体感があるのは、この関係性が築けているところにあるだろう。

地方創生とは短期的な成果を競う政策ではなく、それに関わって行く人達が「この地域をどのようにしていきたいのか」問い続ける長い道のである。東川町はその問いに、四十年近く向き合い続けてきた。その姿勢こそが、いま地方に求められている最も重要な答えなのではないだろうか。

(都筑重信)

※2適疎：「適当に<sup>ゆとり</sup>疎<sup>そ</sup>がある」ことを意味している。